

巻頭の辞



講道館柔道科学研究会は、昭和7（1932）年、嘉納治五郎師範が柔道実技の著しい普及に即して創設された「柔道医事研究会」をその母体としています。当時の資料によりますと、嘉納師範は自ら熱心に研究会へ参加され、召集された医学会の権威たちと共に、柔道に関する医学的所見の蓄積だけでなく、柔道の安全性についての検討や体力面への効果等を検証する専門的作業を行い、柔道科学研究の地歩を固められていたことが窺えます。

この柔道医事研究会は、師範没後の昭和23（1948）年、その名称を「講道館柔道科学研究会」と改め、医学中心の学術研究から、哲学、歴史、教育学、心理学、生理学、キネシオロジー等にまで領域を拡大し、その名称に相応しい科学的な基礎的・専門的柔道研究が行われるようになりました。新しい研究活動は、故猪飼道夫・東京大学名誉教授、故松本芳三・東京教育大学名誉教授、故川村禎三・筑波大学名誉教授、手塚政孝・明治大学名誉教授、尾形敬史・茨城大学名誉教授、故村田直樹・元講道館図書資料部長等が中心となって推進され、多くの研究者たちに支えられながら今日まで脈々と受け継がれてきております。

現在は、運営委員会が中心となり、研究集会の開催と研究紀要の発刊を隔年で行い、学術的な発信をしております。研究領域は、哲学・歴史、競技分析・バイオメカニクス、心理学、体力科学、指導法等に分類され、平素から柔道の学術研究に専心している大学教員を中心として、地道な研究活動が現在も行われています。

今年度ここに10編の研究成果がまとめられ、『講道館柔道科学研究会紀要第十九輯』として上梓することになりました。本誌掲載の研究論文は、柔道の正しい普及・発展に寄与するものであり、柔道の学術的研究面の活性化に繋がる意義あるものと考えております。また、本紀要は全て講道館HPで公開しており、どなたでも閲覧が可能です。ご一読、ご閲覧いただき、柔道研究の更なる発展に役立てていただければ幸いです。

おわりに、関係各位の努力に対し深甚の謝意を表しますと共に、柔道研究の発展のために今後ご尽力賜りたくお願い申し上げます。

令和5（2023）年3月吉日

講道館長 上村 春樹